
誕生日の夜

魚住すくも

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誕生日の夜

【Nコード】

N7204E

【作者名】

魚住すくも

【あらすじ】

朝起きてみると、ケータイのメール。私はそれを目にし、あっかんべーをした……何気ないけれど、特別な一日を描いた作品です。

ケイタイの着メロで目が覚めた。見ると、メールだ。

『誕生日おめでとう。父より』

私はそれを見てあっかんべえをした。

（何さ、しらじらしい）

父さんと母さんは一年前に離婚した。父さんの浮気が原因だった。今は、母さんと二人でアパートを借りて暮らしている。

時計を見る。

「やっべえ、遅刻だ……」私は、つぶやくと急いでリビングに行った。

母さんは、もう仕事にいったようだ。キッチン兼用のリビングは、死んだようにしずまりかえっていた。きつと今日も帰りは遅いにちがない。私の誕生日のこと、覚えているだろうか。

私は、仕度をすませると、高校に向かった。

西日が文庫本にさつとさしこんできた。

「あや、何してんの？」

いきなりの声にびっくりしていると、後ろに由利が立っていた。

「うわ、びっくりした。何って、本、読んでるの」

「ふうん。一緒に帰る」

由利は、幼なじみというやつで、家も近い。高校も、何となく一緒にあったので、けっこう一緒に帰ることが多い。

「私さあ、今日、誕生日なんだあ」わざと、ブリッ子っぽく言ってみる。

「だから、何かちょうだいっ」由利の前に右手を出す。

「あのな。何で私が、あんたにプレゼントしなくちゃいけないのよ」ため息をついて、

べしっと私の手をたたいた。

「何よ、いけずう」

そう言って、私は由利の後を追っていった。

「あ、待って、コンビ二寄っていい？」私はそう言って店内に入っていた。インスタント食品のたなに直行する。

私は、流行ってるカップめんを手にとった。

「ちよつと、何よそれ」

「夕食。母さん今日、遅いから」私が言う。

「ふうん。大変だねえ」と、軽く言う由利。

私たちは、それを買うつと、コンビ二をあとにした。

二人は、しばらく無言であるいていた。

「じゃあね」

白いこじんまりとしたアパートの前で、私は言った。

もう、空は、暗くなりはじめていた。階段をのぼる。

家に入ると、さつそく着がえて、夕食の準備にとりかかった。

白っぽい電灯の中、私のヌードルをすすする音だけがこだました。

食べ終わると、何もすることがなくなって、私はラジオを聞いていた。

一時間が過ぎ、二時間が過ぎた。私の時計の時計は、もう八時を過ぎていた。

いくら何でも遅すぎる。私は、ラジオのスイッチを切って自室を出た。もう、母さんも帰ってきていいはずなのに。

不安が胸からあふれだす寸前、チャイムが鳴った。

「やつほ」

私は玄関で立ちつくした。由利だ。後ろの方には、母さんがいた。「シチューあまったから……」と、由利は言った。そして、母さんにめくばせをした。

「んで、会社帰りに由利ちゃんと会ったからケーキを買いに行ってきた」

そう言って二人は、シチューの入ったタッパーと、白くて大きなケーキの箱をさしだした。

お
わ
り

（後書き）

大学の時にとある公募に出そうとして、結局出さなかった作品です。ダメ元でも、出しときやよかったとあとから思ってみたり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7204e/>

誕生日の夜

2010年12月4日05時43分発行